
ウロボロスの契約者

ゼノリアル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウロボロスの契約者

【Nコード】

N4680Z

【作者名】

ゼノリアル

【あらすじ】

主人公の名前は小鳥遊 悠。悠達はある時を境に日常を失った。主人公を待ち受けるものは何か…
そして、悠達は困難をどう乗り越えるかという物語です。

感想や指摘やアドバイスをもらえると嬉しいです

崩れ始めた日常

「はあ…はあ…」

俺は教室を出て廊下を走って逃げている。

何から？

わからない…いや、わかるはずがない。

後ろから悲鳴が聞こえる。「いや…いやああああ。まだ死にたくない。」

…バクン

女は奴等に上半身を一口で喰らった。女の体から数瞬遅れて血が噴き出す。

「だっ誰か助けてくれえええ。」

それを見た男は助けてと壊れた機械の様に何度も唱える。

「アハハ、そうだ。これは夢、夢なんだ。早く目を覚まさなきゃ…」

俺の前を走っていた男が窓から飛び出す。

あり得ない…

少なくとも俺の知識にはあんな奴等は存在しない。

何故こうなった…

|||||それは1時間前

俺の名前は小鳥遊

悠^{たかなし ゆう}

身長165cm

体重52kg

髪の色は透き通る様な金髪は長く背中の中間ぐらい伸びているのを後ろで一つに纏めている、瞳は碧く肌は周りと比べるとかなり白い。顔は童顔でよく女に間違われてしまう。多分髪が長いから余計女に見えるらしい…

家族は、父さんと母さんそれと双子の妹がいる。

母さんがロシアと日本人のハーフらしく俺達は母さん似らしい。

父さんの仕事はよくわからない。

「お兄ちゃん」

「ん？何か用か」

妹が隣の席から話掛けてきた。俺達は、クラスが同じで今は学校で五時間目が始まる頃。

「さつきから難しい顔してるよ」

「そうか？」

「うん…何か変なお兄ちゃん」

よし、話を変えよう…

「そつだ！遙、今日アイス食べて帰らないか？」

妹の名前は小鳥遊^{たかなし はるか} 遙

遥は、目をキラキラ輝かせて言う

「食べる食べる♪」

「んで、何を食べるんだ？」

んま大体いつものチョコレート三段だろう…

何故こいつは太らないんだろ…

容姿は俺と鏡が向き合っているかの様に酷似し、ただひとつ違うのは大きくも小さくもない胸があるかないか。

妹はかなりの甘党でいつもチョコレート系のお菓子を持ち歩いて食べている。

本人によると甘いものを食べないと血液の循環が悪くなるとか…

それって脳の回転じゃね？んま説明はこれぐらいで…俺は誰に説明をしてるんだ？

「やっぱりチョコトリ（チョコレート×3）かな」

楽勝、さすが俺。妹のことなら何でも分かるぜ…

今誰かシスコンとか言わなかったか？

コロスヨ？

「お兄ちゃんはなに食べるの？」

「俺はバナラで…！」

「相変わらず王道だね♪」

「まあな…」

「ところでおにい「悠一緒に遊びに行かない？」ちゃん…」

俺と遥が話していると扉に背を預けた。友人がいた。

確か名前は…

…

じゅ

遥、頼むからそんな目で俺を見るなあ！！

「オッス…。悪いな今日は遥とアイス食べに行くんだ…」

遥はキラキラ輝かせてこっちを見るな…恥ずかしいだろ？

「おいおい。今日はじゃなくて今日もだろ…」

「そうか？そろそろ授業始まるぞ？」

「そうだな、まだ話は終わってないからな…」

「ハイハイ」

友人は綺麗なターンをして自分の席に戻る。

その時、

ゴゴゴゴ

「キャア！？」

「うお、地震か？」

「お兄ちゃん…」

「とりあえず収まるまで待とう」

「うん…」

地震は直ぐに収まったが…

「おいおい、なんだよあれ…」

男子生徒が窓の外を指差す。

そこには街で一番大きな研究所を中心とした半径10kmもの範囲
すべてのものが消えていた…

右手の温もり

この街には幾つか研究所がある。

そして、街から2km離れたところに一番大きな研究所があった。
この研究所は主にブラックホールを人工的に生成するという研究が行われていた。

だが今は其処には何もない。
其処にはただ綺麗な半球状のクレーターが出来ている。
森や家、公園やビル、ましてや巨大な遊園地までもが綺麗に消えている。

「何だよあれ…」
俺は動揺を隠せない…

数分前はこんな物は存在しない。とすれば今あった地震はあれが原因と考えるのが妥当だ。

だが信じられない。

たった、たった数分でこんな事になれば人は混乱するのは当たり前だ。

だが俺は妹に声を掛けられ正気に戻る。

「お兄ちゃん…」

妹が俺の右手に手を絡ませるそれが今は安心感を覚えるが恐怖は消えない…

「大丈夫…」

頑張つて答えた声はひどく小さく今にも消えてしまいそんな感覚を覚える。

その時

「お兄ちゃん…何かあるよ？」

遙がクレーターの真ん中を指差す。俺は其処を見る、其処には黒い物が浮いている…

それは微妙に動いて見える。それは次第に大きくなる、いや近づいて来ていた。

その姿はこの世の物では無いことを証明していた。

後ろに付いている黒い大きな翼、鋭く巨大な爪、人を余裕で飲む込めそうな口、全身が黒に対して目だけが赤で不気味さを一層増しているそれは何故か西洋のドラゴンに酷似していた。

「ヤバイよな…あれ…」

「十中八九そうだよな」

そんな場違いな感想を言っている間にもどんどん近づいて来るドラゴン。

そして平和の均衡が崩れた。

「み、みんな逃げろ！」

誰かが言う、それがトリガーとなり皆が教室から廊下へ雪崩こむ。

「きゃっ！？…お兄ちゃん！！」

見れば遥が人に押されて流されていく。

「遥ッ！」

俺は右手を伸ばす！！

だが、俺の右手はただ何もない空間を掴むだけだった…

再会

俺は逃げている…

あの黒い奴から。

遥の姿を探すも見当たらない。

もう嫌だ…

どうしてこんな事になった!?

あり得ないあり得ないありえないありえないアリエナイ…

黒い奴は数十メートル後ろには、人を喰らう悪魔の姿に視界に移す。

(あんな奴は居てはいけない… いけないんだ…)

「クソが…」

俺はひたすら走る。

階段が見える、俺は階段まで来ると一気にかけ降りる。

今まで感じたことのない喪失感と焦燥感が俺を苦しめる。

階段を降りればすぐ其処は玄関になっている。

俺は玄関を抜けた。

「お兄ちゃん!!」

俺は、その声で何かが満たされたような感覚が今はただ嬉しかった。

遥がいる。すぐそこに…

手を伸ばせば届く距離。

「はるかッ…遥もう離さない!!」

安堵する俺と早く此処から逃げろと命令する俺がいる。
だけど

「お兄ちゃんッ…怖かった、怖かったよ」
遥が居れば何もかもが上手くいく気がする。

「大丈夫、もう大丈夫だよ」

俺は遥を抱きしめた。

遥の温度が制服越し伝わってくる

「逃げよう…」

俺は遥かの右手を取ってまた走り出す。

俺は改めて知った。

遥は俺に取って大切な存在なんだと…

俺達は走る。

周りは黒い奴が殺した悲惨な死体がいくつも転がっている。

逃げよう、2人で居ればなんとかなる。

そんな気がする。

だからもう二度と離さない様に強く優しく遥の手を握りしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4680z/>

ウロボロスの契約者

2012年1月9日21時49分発行